福島県立医科大学学術成果リポジトリ

FUKUSHIMA MEDICAL UNIVERSITY

Do Family Medicine Clerkships Complement Clerkships at Teaching Hospitals in Japanese Undergraduate Medical Education?: An Observational Study

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2021-04-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 光輝 メールアドレス: 所属:
URL	https://fmu.repo.nii.ac.jp/records/2000341

論　文　内　容　要　旨

氏名（しめい）	なかむら　こうき 中　村　　光　輝
学位論文題名	Do Family Medicine Clerkships Complement Clerkships at Teaching Hospitals in Japanese Undergraduate Medical Education?: An Observational Study （日本の卒前医学教育において総合診療/家庭医療学実習は教育病院での実習を補完するのか？：観察研究）

背景：世界保健機関はすべての国がプライマリ・ヘルスケア（PHC）を強化する方向へ国の保健医療制度をかじ取りすることを奨励している。強力で持続可能なPHCを支援するには、PHCの専門職である家庭医・総合診療医が医学部の卒前カリキュラムに深く関わる必要がある。一方、各国の医学部は世界医学教育連盟のグローバルスタンダードに準拠したカリキュラム改革の最中である。この日本版の中で、総合診療/家庭医療学は全ての学生が必ず履修しなければならない「重要な診療科」のひとつとして明記された。こうしたPHCの重要性の認知にも関わらず、医学生が総合診療/家庭医療学実習（以下、家庭医療学実習）を行う機会はいまだ不十分である。卒前カリキュラムに家庭医療学実習が受け入れられるためには、家庭医療学実習が教育病院での実習を補完するかどうかを明らかにする必要がある。

方法：2018年度の福島県立医科大学医学部5年生（125人）を研究対象とした。学生は3か所の家庭医療診療所のいずれかに配属され、5日間の実習を行った。実習内容は外来、在宅医療、振り返りを主軸に構成された。学生は家庭医療学実習の開始時と終了時に自己評価を行い、指導医は終了時に学生を評価した。評価項目は医学教育モデル・コア・カリキュラムの7領域（総合診療/家庭医療学の学修目標、診療技能と患者ケア、コミュニケーション能力、患者と医師の関係、チーム医療の実践、社会における医療の実践、課題探求・解決能力）から構成された31項目で、5段階評価とした。家庭医療学実習の前にローテートした教育病院での実習による自己評価の上昇を評価するために、家庭医療学実習の開始時点での自己評価の平均値を学期ごとに算出した。家庭医療学実習による自己評価の上昇を評価するために、関連2群のウィルコクソンの符号付き順位和検定を行った。

結果：125人全員が研究を完了した。家庭医療学実習の開始時点での自己評価では31項目の内7項目で1学期よりも3学期で自己評価が0.4点以上上昇していた（1.診断推論、7.病歴聴取、8.身体診察、9.プレゼンテーション、10.慢性疾患、14.患者と家族への配慮、19.患者プライバシーの配慮）。一方、家庭医療学実習における自己評価の前後変化では31項目全てで統計学的に有意な上昇を認めた。

結論：本研究では病院実習で自己評価が上昇しにくい項目を含む31項目の自己評価が家庭医療学実習によって上昇した。この結果は日本の卒前医学教育における家庭医療学実習の意義を考える上で重要な知見となる。

学位論文審査結果報告書

令和３年２月１５日

大学院医学研究科長　様

下記のとおり学位論文の審査を終了したので報告いたします。

【審査結果要旨】

氏　　　　名　　　中村　光輝

学位論文題名　　Do Family Medicine Clerkships Complement Clerkships at Teaching Hospitals in Japanese Undergraduate Medical Education? : An Observational Study

本研究は、医学部の臨床実習において、総合診療/家庭医療学（福島医大においては、地域・家庭医療学講座が担当）がどのような学習効果をもたらしているのかを検証したものである。

従来、臨床実習における学生の評価項目は、知識、技術、態度の３要素にわけられるが、これらをバランスよく評価する方法については、試行錯誤が続いている。本研究においては、医学教育モデル・コア・カリキュラムから抽出した７領域３１項目に対して、実習前後における学生自己評価と、実習終了時の指導医による評価を行った。その結果によれば、実習開始時の評価では、３１項目中７項目は１学期よりも３学期での学生自己評価が高くなっており、これらは、従来の病院実習で自己評価が上昇する項目であると判定された。一方、残り、学期毎に自己評価が高くなっていない２４項目を含む全３１項目は、総合診療/家庭医療学実習の前後で明らかに自己評価が高くなっており、総合診療/家庭医療学実習は、医学教育モデル・コア・カリキュラムで目指している臨床実習の達成目標を達成するに充分な実習であることを示唆しているとした。

本研究は、客観的な評価ではない主観的な自己評価であること、評価基準が明確でないこと、自覚的達成度が長期にわたって定着しているかの検証がなされていないことといった様々な研究上の問題点はあるが、臨床実習の在り方に一石を投じる研究であり、臨床実習の評価を研究に発展させたことは充分な新規性があり、今後の更なる発展も期待される内容であると認める。

以上より、本論文は学位論文として相応しいものであると報告する。

論文審査委員	主査	医療人育成・支援センター	教授	大谷　晃司
	副査	外科研修支援担当	教授	木村　隆
	副査	法医学講座	准教授	西形　里絵